マルクスにおける市民社会の概念について

平田　清明

はしがき

市民社会ということばが，この国では，アカデミズムの範疇から現実生活の用語になりはじめている。このことばによって何がどれほど表現されうるのか，議論の余地あるところである。しかし市民社会という概念が，この国での西欧古典研究者の書斎から一歩ふみ出して，現実生活のなかに生きはじめていることは，現代日本の一特徴として，たしかに指摘されうるところであろう。この10年のきわめて急激な資本蓄積が，異常なまでに急速な都市形成を促迫し，そこに都市民としての社会形成を促進したことが，戦後民主主義の制度的展開とともに，この概念の常用化を喚びおこし普及化をすすめているのであろう。

しかし，そのようなものとして市民社会が理解されるかぎり，それは，産業社会・大衆社会・情報社会と同じく，資本主義社会のある状況または局面を示すものであるにすぎない。この，状況として把握された市民社会なるものは，はたして，市民社会の概念にふさわしいものなのだろうか。市民社会という概念が意味しているものと，このことばによってこの国で意味されているものとが，どれほどに偕調しているのか。偕調しているどころか，対立さえしているのではないのか。たしかに検討にあたいする問題であろう。

だがいったい，市民社会の概念とは何なのか。これは現代日本の批判的考察における一論点をなすだけでなく，西欧社会諸科学の研究における全論点をつらぬく基本問題である。なぜならば，市民社会という形態での特殊な社会形成こそ，西ヨーロッパ史の展開そのものであり，このようなものとしての文明史を基礎として西欧的社会諸科学が成立しているからである。事実，西ヨーロッパの思想と理論の歩みは，市民社会とは何かをめぐって展開したのであり，この市民社会をいかに把握するかによって，その思想と理論の歴史的社会的性格が規定されるのである。私が本稿において取りあげるマルクスのばあいも，けっして例外ではない。いやそれどころか，マルクスこそ，市民社会とは何かを探求して，かの厖大な経済学研究にはいったのであり，この経済学的研究を通じて，近代市民社会の内在的にして批判的な考察を完成させようとした人物にほかならないのである。このマルクスにおいてこそ，市民社会は，たんに歴史の一状況であったのではなく，まさに特殊西欧的な社会形成そのものだったのであり，またそのようなものとしての歴史の理論的把握にあたっての方法概念そのものだったのである。西欧的知性に宿る市民社会史としての歴史把握を，市民社会そのものの内在的批判を通じて，真の人類史開花に生かそうとしたのが，マルクスに独自的なことなのである。

しかしながら，このようなものとしてのマルクスを見うしなうことが，この極東の島国でのマルクス研究であった。ヨーロッパ古典の内在的研究によって媒介されぬマルクス研究は，右に見たような，マルクスにおける社会＝歴史認識の核心を，見うしなってきた。それどころか，マルクスにおける市民社会の概念そのものさえも，うしなってきた。ほかならぬマルクス自身が，その著作において，言うまでもなくその主著『資本論』においても，しばしば市民社会という概念を使用しているにもかかわらず，その理解にあたっては，この概念の存在そのものを拒否し，それについて何ほどか語らねばならぬばあいには，商品経済社会あるいは資本主義社会という特殊日本的な用語をも

ちいてきたのであった。これらのことのために，マルクスが後代につたえた資本家社会の認識を誤まつと同時に，ひろく史的唯物論の基本構成を見誤まってきたのである。本稿が特にマルクスにおける市民社会の概念について論じようとするのは，そこにうしなわれたものを回復することによって，マルクス的社会＝歴史認識の再生を保証する端緒を，切りひらこうとするためである。

I　市民社会と資本家社会

社会(Gesellschaft)の概念としてマルクスに存在したものは，商品経済社会や資本主義社会ではなくて，「市民社会」と「資本家社会」である。社会とは何よりもまず，人間の結合様式である。特殊な形態規定をうけた諸人格の結合関係である。この諸人格が，たとえば商品あるいは資本というような物象の人格化にすぎぬとしても，社会として，ひとが思いうかべるべきものは，諸人格の結合関係であるほかないのである。(物象の人格化は，人格の物象化の帰結にほかならぬからである。)市民社会と資本家社会，これが近代社会についてマルクスが用いた概念であることを，確認せよ。社会概念がこのようなものだからこそ，社会の経済過程の形態規定が，政治的・道徳的過程の形態的特質を規制するものとして，はじめから措定されるのである。経済的政治的道徳的諸過程の共時的展開としての社会形成，これをこそ，市民社会の資本家社会への転成の過程として，マルクスは把握したのである。商品経済社会と資本主義社会というタダモノ論的把握は，マルクス理解を初発において誤まつ。

右に指摘したことのうち，とくに，市民社会の資本家社会への転成に注意せよ。市民的社会関係の資本家的社会関係への転成であることに，重ねて注意されたい。なお念のために言うが，ここでの資本家とは，「市民的資本家」bürgerlicher Kapitalist である。フランス語版『資本論』の用語で言えば,「資本家的市民」bourgeois capitaliste である。つまり資本家とは市民としての社会関係をアウフヘーベンしているのである。ここにアウフヘーベンとは，高次形態における低次関係の保存・高揚にほかならない。市民社会の資本家社会への不断の転成の過程として，現実の市民社会は存在するのであり，同じくそのようなものとして現実の資本家社会が存在するのである。このゆえにマルクスは，市民社会ということばにおいて，資本家社会を意味させていたのである。なおこの点についても念のために言うが，資本家社会成立の以前における或る一定時点において，市民社会なるものが歴史的に実存したのではない。資本家社会から区別されたものとしての市民社会が，歴史的一段階をなすのではない。市民社会段階なるものがそれ自体として存在するわけではない。市民社会という第1次的社会形成の資本家的な第2次的社会形成への不断の転成として，現実的な社会形成が展開するのである。

(このような社会形成が典型的に見られるのは，西ヨーロッパにおいてのみである。そこでの社会形成が，市民的なものの資本家的なものへの転成として，展開するとき，この展開の過程には，商品・貨幣所有者の資本所有者への経済的転成が基底として展開すると同時に，市民的所有権の資本家的領有権への転変の過程が展開しているのであり，これらの過程に規定された政治的・倫理的な諸関係の転成も，また進行するのである。マルクスの『経済学批判』や『資本論』は，言うまでもなく，その叙述を，社会形成の経済的基礎過程にしぼっているのであるが，そこで記述されている経済学的諸範疇の展開は，排他的に経済的な過程のみを表示しているのではなく，経済的諸形態によって規定されている法的・道徳的諸関係をも表示しているのである。このゆえに，『資本論』は，経済的基礎範疇の重大な転成点ないしは結節点において，しばしば，直接に人格を登場させ，経済と道徳と法を論ずるのである。『資本論』が西ヨーロッパにおけるこのような経済・法・道徳の共時的展開を見すえて執筆されたものであり，その叙述内容そのものがすぐれて西ヨーロッパ的なものであること，今日のわれわれが確認して然るべきことである。

というのは，このことの未確認が『資本論』理

解を誤まらせる一源泉でもあるからである。——諸結節点での人格にかんする直接的叙述を別とすれば，『資本論』での諸範疇およびそれらの転化過程は，非西欧的地帯においても，多かれ少なかれ妥当する。この意味において『資本論』は一種の普遍的理論である。『資本論』の意義の巨大さを，われわれはここにたしかに見いだしてよいのである。しかしがなら，非西欧的地帯において，ひとは，『資本論』での経済学的諸範疇の存在をそこに見いだすとき，そこにはおよそ市民的ならざる法・道徳関係が存在することを，安んじて見うしなうのである。そればかりか，それらの地帯に存在する市民的ならざる経済関係をも，あえて視野の外に置くのである。そしてそのような把握をもって，マルクス主義のそれら社会への適用とみなすのである。社会の唯物論的把握だと，みずからみなすのである。

このような把握がマルクス的唯物論ではなく，通俗のタダモノ論であること，言うまでもないであろう。)

以上に述べたことを範疇史的観点から，少しく敷衍してみれば以下の通りである。

II　市民社会の範疇的再構成

マルクスは，市民社会という概念を，直接にはヘーゲルから，そして遠くファーガスン，スミスから，継承した。いずれのばあいにも批判的に継承した。この批判的継承は，彼自身による新たな範疇の創設と，それによる市民社会の概念的再構成として，展開されたのであった。

1　方法概念としての市民社会

マルクスの以前に，そしてヘーゲルの以前に，ルソー，ファーガスン，スミス等によって，分業と所有を基礎範疇とする市民社会認識が西ヨーロッパに成立していたこと，今日われわれの思いおこすにたることである。彼ら相互の相対的対立は，市民社会認識の核心的視座の共通性を否定するものではない。ヘーゲルの独自性はすでに概念として成立していた市民社会を，国家との関連において方法的に問うたことにある。すでにファーガスンによって提起されていた社会の上部構造 superstructure が，ヘーゲルにおいて，社会認識の1個の方法概念として，事実上措定されていた，と今日からは言うことが許されるであろう。ただしヘーゲルにあっては，国家へと揚棄さるべき市民社会は，理念の一分裂形態であり，しかも，より低次の分裂形態であった。この低次の具体性を高次の観念性(国家)に転化し，これら2契機の一体性を実現することが，理念の現実的(ヴイルクリヒ)な歩みなのであった。

ヘーゲルによってマルクスの前に，このように提起されていたからこそ，マルクスは，市民社会そのものがおのれのうちに国家を，そして特定の理念を，上部受胎し，それを外化・疎外することによって，おのれの社会形成を完成するのである，とベグライフェンすることができたのである。つまり社会形成の基底的モメントを，抽象的なる理念ではなく，具体的な市民社会に見いだし，市民社会としての社会形成を歴史の現実的(ヴイルクリヒ)な過程として確定することができたのである。

市民社会とは，そこから自立する法と道徳との関連を自れのうちにはらむものとして，はじめからマルクスによって認識され，そのようなものとして確定されるのである。市民社会とは，社会の総体把握のための方法概念である。

2　交通様式と生産様式

ここに市民社会が方法概念として成立するとき，そのときすでに，この概念は，「生産様式」・「交通様式」・「消費様式」，そしてそれらの統一としての「再生産様式」という，新たな経済学的範疇において，再構成されていた。

それはまず，特定の交通様式として把握される。市民社会は何よりもまず，交通的社会commercial society としてある。それは，「私的諸個人」が対等な所有権者として自由に交際(交通)しあう社会である。同市民関係そのものなのである。このような交際＝交通の形態を，市民的な交通形態または交通様式と，マルクスは命名する。(ここにはマルクスの独自性はない。)この市民的交通様式は，言うまでもなく人類史のある時点に突如あらわれるものではなく，分業としての生産諸力が発展し

て，商品生産という形態での社会的生産の様式が成立・展開することによって，社会の支配的な交通様式になるのである。交通様式を，生産様式によってうみだされるもの，したがってまた，これによって規定されるものとして，方法的に確定したことこそ，マルクスの独自性をなすものである。そこに成立する生産＝および交通様式としての市民社会把握，これが市民社会のマルクス的再構成の第1歩である。生産において自由に考え理解し行動しえてこそ，交通において自由に考え理解し行動しうるのである。そして，生産と交通においてこのように関係行為しえてこそ，消費において自由な選択と享受が可能になるのである。それは，生産と交通と消費における個体の自己獲得(所有 propriété, Eigentum)にほかならない。すなわち「個体的所有」そのものにほかならない。(ファーガスンが「個体の権利」として挙げた「自己防衛と自由な行動の権利」および「理性の理解力と心情の感受性を保持する権利」を，ここにおもいうかべてよい。)しかし市民的生産様式において成立する個体的所有は，「私的所有」としての形態規定をうけている。それは，生産手段を私的に所有することによって，生活手段を私的に所有するものであり，生産・交通・消費のいずれにおいても，排他的なものである。生産と生活における共同性を排除することによって，他人を排除するだけでなく，おのれ自身をおのれの人間的＝共同的本性から排除するものである。つまり自分自身の他者をおのれの外にもつだけでなく，おのれの内にもつものである。(ファーガスンが描く「自分自身で自分を心配せねばならぬ」新しい個人を，ここに思いうかべてよい。)このような個体的所有と私的所有との関連における差別を，市民社会の決定的な要素として認識し叙述したことこそ，市民社会のマルクス的再構成の決定的な歩みである。

なお，この私的所有に関連してであるが，市民的生産様式は，何よりもまず，自主独立の労働過程によって特色づけられるのであるが，抽象的な価値の生産過程を展開することによって，他人の労働生産物を，さらには他人の労働を，購買＝支配するという独自の「領有様式」をうみだす。(不平等起源のマルクス的措定。)(領有とは，共同利用のもの或いは他人所有のものを奪いとること。)それゆえに私的所有の不平等は，富者による貧者の支配をうみだす。

以上の諸範疇，すなわち，生産・交通・消費様式，再生産様式，個体的所有，私的所有，そして最後に領有様式，これらによって，市民社会がまず基礎的な範疇的再構成をあたえられるのである。それら諸範疇の，狭義の経済学的基底概念が，商品と貨幣である。

3　所有権法の転変

市民的生産様式は，それ自体の競争的自己展開において，自己解体的な運動を展開する。それは，私的所有の不平等を拡大させることによって，多数の市民的生産者を敗北させ，対等な競争場裡から駆逐する。(この駆逐の過程は，市民的領有様式を補完するものとしての旧社会の暴力によって，歴史的に媒介される。)そして，そこに駆逐された旧生産者を，市民的交通形態を経て，おのが生産過程のなかに包摂する。ここにおいて市民的生産様式は，資本家的生産様式に転変する。この生産様式の転変は，多数の市民的生産者による生産手段の私的所有の少数市民による破壊を含意しているのであり，私的所有の不平等の質的転換を意味している。しかもこの転変の時点において，なおかつ，市民的な交通様式は，社会公認の，つまり公式の交通形態として存続するのであり，そこには自由・平等という市民的原理が形式的に保存されている。ただしそのばあいの自由・平等は，すでに質的転換をとげた私的所有の不平等の外形・仮象にほかならないのであるが。

この生産様式の転変にともなう交通様式の市民的形態の保存と，その資本家的内実の形成とを，とくに顕示する過程が，再生産過程(生産過程と流通過程との統一の過程)としての蓄積過程である。ここでは，自己労働にもとづく市民的所有は形式上保存されながら，その内実は他人の不払労働の領有にほかならない。市民的所有権法が，その形式を維持したままで，資本家的領有権法に転変しているのである。同市民関係がその形式を保存したまま，資本家階級による労働者階級の支配

関係に転変している。資本家的蓄積様式に固有なこと，それは，同市民関係という形式での階級的な支配隷従関係の形成を確立することである。

私がすでに指摘した，市民社会の資本家社会への転変とは，右のような諸範疇の展開によって理論的に表現されているのである。市民的生産様式の資本家的生産様式への不断の転変，これがその基底的・決定的過程である。それゆえに『資本論』は，その第1巻第1篇商品・貨幣論においてまず，市民的生産様式の形態的特質を展開し，第2篇貨幣の資本への転化論において，市民的生産様式の資本家的生産様式への転変の形態論的叙述をおこない，ついで第3,4,5,6篇剰余価値・労賃論において，この転変の実体論を展開し，さらに第7篇蓄積論において，資本家的蓄積様式という姿であらわれる支配のブルジョア的形態を明らかにし，そして最後の第8篇において，この転変の歴史的理論的意義を明らかにしたのである[1)]。『資本論』第1巻全体が，不断の転変の過程を，この過程を形成する諸契機の重畳的展開として理論的に表現するものなのである。この第1巻との関連で言えば，第2巻資本流通過程論は，これまたこの不断の転変を，生産過程と流通過程との統一たる再生産過程として，生産様式と交通様式の統一たる再生産様式として，より高次に独自展開するものである。この再生産様式としての展開のうちにすでに含まれているところの資本家的領有様式の不断の生成，言いかえれば，資本家的再生産過程のうちにすでに含まれている資本家的領有過程の不断の展開，これを，その展開の構造的特質とともに明らかにするのが，第3巻である。そしてこの最終巻は，その最終篇「収入とその諸源泉」において，資本家的領有が，『資本論』冒頭篇すなわち市民的生産様式論においてその形態的特徴を明らかにされた，かの市民的所有の，資本一般体系における最終的実存形態であることを，解明するのである。

なお，『資本論』体系は，その準備段階において作成されていた，資本・賃労働・土地所有・国家・外国貿易・世界市場という展開序列によって構成される経済学体系プランのうちで，資本・賃労働・土地所有の一般的規定を展開したものであり，また国家・外国貿易・世界市場の最抽象的規定を内蔵するものである。本稿での主題に限定してこのプランの内容を性格づければ，プランそのものが，内なる市民社会(資本・賃労働・土地所有)による国家の疎外と，そこに疎外される国家によって媒介された外なる市民社会(外国貿易・世界市場)との総体的展開であり，この意味において，「国際的市民社会」の範疇展開そのものにほかならないのである。

マルクスにおける方法概念としての市民社会の設定は，文字通り体制概念としての市民社会の範疇展開として，不断に成就するのである。

III　市民社会視座と唯物史観

1　経済的社会形成と社会の経済的構造

われわれが右に見た『資本論』全3巻における，そして経済学体系プランの全次元における，経済的諸範疇の全過程的統一としての展開，これこそ「経済的な社会形成」ökonomische Gesellschaftsformation なのである。それは，成熟した一時点においては，異次元の論理的諸契機の共時的重畳として，一種の構造的相貌を呈する。このゆえに，経済的社会形成そのものが「社会の経済的構造」を展開するのである。「構造」が「形成」そのものの展開であることに，とくに注意せよ。なお念のために指摘しておくが，「形成」Formation とは，地質学上の「成層」Formation という概念を，社会＝歴史認識に移植したものにほかならない。成層(Formation)とは，諸次元の地層形成のことであり，その特質は，不断の形成ということにまず存在するのであり，そして次に，この形成が，諸次元の地層の重畳的展開として，構造をな

1)　『資本論』第1巻は，マルクスが最終的責任をもって編集したフランス語版にしたがって，その篇別構成を知るべきものである。フランス語版『資本論』は，ドイツ語版と異なって，第8篇を新たに設定し，そこに展開される本源的蓄積論すなわち転変の歴史的＝論理的過程の記述をもって，第1巻全体を総括するのである。詳しくは，別稿「マルクス研究におけるフランス語版『資本論』の意義」(『思想』1969年第5・6号)を参照されたい。

すところに，存するのである。(これは1881年，ザスーリッチあての手紙において，マルクスがみずから語ったところである。)

この経済的な社会形成が，その全範疇展開をとげつつあるとき，それは，みずからにふさわしい政治的・社会的・精神的諸契機を，おのが経済構造としての展開そのもののうちに，すでに上部受胎しているのである。そして，それらの諸モメントを自立的なものとして外化＝疎外していく。つまり，おのれの「上部構造」として疎外する。この点から，経済的社会形成を顧みれば，それはまことに，社会形成の「現実的土台(ヴィルクリヒ)」である。18世紀のファーガスンが措定した上部構造という概念を，ここにおいてマルクスは，その苦渋にみちた経済学研究とその体系的展開のうえに，再措定するのである。社会の総体的諸連関がこのようなものとして，理論的に叙述されるのである。

「形成」の「構造」としての自己展開に，かさねて注意されたい。市民社会としての社会形成が資本家社会として構造化することを，フォルマシオン概念は教えているからである。より一般的に言えば，社会形成が歴史形成にほかならぬこと，つまり社会＝歴史であることを，無言のうちに語っているからである。社会＝歴史という表示方法に奇異の念をいだく者は，いまだフォルマシオン概念について何事をも知らぬ者である。

2　近代的階級概念と個体的所有

このような，形成の構造としての展開を現実にうみだしたのが，市民社会史としての西ヨーロッパ史であった。マルクスは，この市民社会史を視座にふまえることによって，その経済学的諸範疇を構築し展開することができたのであり，このことによって，歴史の唯物論的理解に科学的内容をあたえることができたのである。

この市民社会を視座とする経済学と史的唯物論の展開にあたっては，すでに幾度か指摘しておいたように，ファーガスン，スミス等の市民社会史観＝文明史観が，継承されている。これら18世紀の市民的な歴史＝経済学者においてすでに，分業と私的所有の発展が特殊な社会的な内実を得て，奴隷制・農奴制等の社会の階級的構成をうみだすものであることが，直観されていた。19世紀のフランス実証史家にあっては，社会の歴史が階級闘争の歴史であったことが，明白に意識され叙述されていた。ティエリ，ギゾー等のばあいが，それである。したがって市民社会史観も，その系論としての階級史観も，マルクスの以前においてすでに成立していたのである。

マルクスがそれらを継承しながら，かれ独自にそれを発展させたのは，継承が批判的継承だったからにほかならない。18世紀および19世紀の市民的な歴史＝経済学者は，文明社会としての市民社会を，初期未開の社会と比較対比することにこと欠かなかったが，彼らは未開から文明への道を，分業と私的所有の量的発展の過程として把握していたにすぎなかった。これに反してマルクスは，市民社会の対立概念として共同体を措定し，その両者においては，分業と所有が質的に異なること，まったく対立的に異なることを，市民社会の哲学的経済学的批判を通じて，また世界史の始源としてのアジア的生産様式を事実史のうえに知ることによって，確認したのである。共同体は，市民的生産様式の対立概念としての共同的(コレクティヴ)生産様式の歴史的実存形態である。それはヨーロッパ史の始源に存在するものであると同時に，ヨーロッパ的市民社会＝資本家社会の外側に存在するアジア・アフリカの，現存の支配的生産様式なのであった。マルクスの視野が世界史の始源に到達すると同時に，非西欧的地帯をふくむ全世界の人類史の深さと広さに到達したことこそ，マルクス的歴史＝社会認識をして独自的なものたらしめるものである。

この市民社会と共同体との対立の認識は，現存する市民社会の理論的批判において用意されるものであるが，それは同時に，古典古代および中世における特殊な市民社会形成の理論的考察から獲得されたものであり，そのことによって，マルクス的西欧市民社会史論を特徴づけるものでもある。歴史の現代において西ヨーロッパと総括される地帯には，まず最初にアジア的共同体解体の2類型(古典古代的およびゲルマン的)が，それ固有の私的所有または個体的所有を段階的に発生させているのであり，それが奴隷制および農奴制としての

社会形成を固有に成就すること，これをマルクスは正当に視野におさめていたのである。分業と所有の第1次形成が「固有の弁証法」としての回転過程を通じて，分業と所有の第2次形成へと転変することを洞察したのである。そこに成立する私的所有者の社会は，一種の市民社会である。遠くギリシァ・ローマの都市国家における市民的社会，近く中世・都市国家における市民的社会が，それである。しかしこれらの市民社会は，共同体の解体のうえに成立しているものでなく，逆に，共同体のうえに，共同体の固有の一属性として成立展開しているものである。この意味において，それらは，共同体の解体のうえに成立すると同時に，この解体を完成するものとしての「近代市民社会」に対立するものである。そのゆえに，それらは，「旧市民社会」とマルクスによって命名される。「近代」と「旧」とが対立概念であること，自明のことながら注意を要する。そこにこそ，マルクスの「近代」概念が存在するからである。「近代」とは，マルクスにおいて，およそ共同体的なるものの対立概念なのである。この「近代」に対立するものとしての「旧」alt という用語自体が，たんなる時間的先行性を意味するものでないこと，確認するにたることである。それは，しばしば旧代的 altertümlich とも表現されるのであって，その内容は，共同体的なるものを明確に意味するのである。「旧代的 altertümlich な生産様式の近代的 modern な生産様式への転化」として歴史過程を把握する視角が，マルクスには明白に存在するのである。マルクスにおける「近代」概念の再発見，これはマルクス研究の新地平を切りひらくものであって，マルクス研究をゆがめるものでは絶対にありえない。逆に，この「近代」概念の再発見をともなわぬ粗野な階級一元論的マルクス理解こそ，マルクスをゆがめるものである。マルクスにおける「近代」概念の独自性は，18-9世紀における市民的な歴史＝経済学者の多くがそうであるように，近代をたんに肯定的に見るのではなく，つまり一面的に見るのではなく，肯定的認識のなかに否定的な理解を，また同じことだが，否定的な認識のうちに肯定的理解を，成立させるものである点に存する。つまり，いわゆるブルジョア史家が同一物と見た私的なものと個体的なるものとを，対立物として把握し，「近代」が，その私的否定性において個体的肯定性を展開することを，逆にまた，個体的なるものが私的な形態によって制約されてのみ実現することを，マルクスは確認したのである。そして，この近代において，旧き共同体が破壊されることによって，個体の本来的共同性が破壊されることを，見いだしていたのである。

このようなものとしての近代的な生産様式への，旧代的生産様式の転化は，かの本源的蓄積の過程において，「封建的生産様式の資本家的生産様式への転化」の過程として決定的に遂行される。すべての旧代的生産様式が封建的生産様式として中世社会において再編成されてきたからである。

このばあいにおいて，「近代的生産様式」とは，不断に資本家的生産様式へと自己転変する市民的生産様式であること，本稿の読者がすでに明察するところであろう。市民的生産様式が旧代的生産様式と闘争しつつ自己展開し，資本家的生産様式へと転変する過程こそ，マルクスの言う「近代社会」形成過程にほかならない。

このことを見うしなうとき，ひとは，資本家社会についてのマルクス的認識の基礎範疇をことごとく誤解する。と同時に，市民社会＝資本家社会の揚棄としてのコミュニスムの，理論的展望を，根底的に誤まつ。

基礎範疇誤解の典型は，ブルジョアジーとプロレタリアートという周知の範疇の誤解・誤用のうちに見られる。ブルジョアジーとは資本家階級，プロレタリアートとは労働者階級と単純に読みかえるのが，これまでのマルクス理解の通例の事態であった。ブルジョアジーとは，語源的に同市民関係である。そして最後まで，その語源的意義を保存するのである。それは歴史具体的には，中世における封建領主の支配に抗して都市を形成した独立の手工業者および商人の，自由なる人間としての資格を意味した。また，これらの資格を共有する市民相互の社会関係を意味した。さらに，このような人間の集団のことを意味した。したがっ

てブルジョアジーとは，封建的なるもの，そして，そこに含まれている共同体的なるものの，否定によって特徴づけられるのである。古典古代における市民も，私的所有者という1点において，この範疇に属するのであり，じじつ中世におけるブルジョアの歴史的先例とみなされたものである。このブルジョアジーの成長発展の過程において，私的所有の不平等が生産＝交通諸手段の私的な所有と非所有という姿にまで発展するとき，それら諸手段の私的所有者層は，ブルジョアジーとしての市民関係の実質を握ることによって，おのれの層のみをもってブルジョアジーを僭称し，市民としての公生活を独占するのである。そして，その非所有者層としての貧困な同市民層から，そのブルジョアジーとしての資格を事実上剝奪し，これを「新たなプロレタリアート」とみなしたのである。ここに，同市民関係のなかから近代的階級関係があらわれるのである。この歴史＝社会形成の過程をとらえて，マルクスは書いたのである——「ブルジョアジーが成長するにつれて，その胎内に新たなプロレタリアートが，近代プロレタリアートが成長する。プロレタリア階級とブルジョア階級との間に，1つの闘争が発展する。」(『哲学の貧困』第2章第7考察)。ここにプロレタリアートとは，ローマ共同体＝帝国における最低の第6身分であり，子供を産んで国家に兵士を提供することによってのみ国家に寄与する赤貧の市民のことである。このプロレタリアートの特質は，共同体の一員としてあったことであり，したがってまた「パンとまつり」の享受を共同体によって保証されていたことである。共同体関係を身につけたところの，この旧プロレタリアートに対して，いまや，共同体関係に対立し，これを破壊するものとしての同市民関係のなかから，その胎内そのものから，「近代プロレタリアート」がうまれでる。ブルジョアジーの近代的ブルジョアジーとしての確定に対応して，近代的プロレタリアートという概念が確定するのである。『経済学批判』や『資本論』における形容詞ぬきのプロレタリアートは，ただ短縮形にすぎない。ブルジョアジーを資本家階級に，プロレタリアトを労働者階級に，単純に読みかえるのは，商品・貨幣をただちに資本と賃労働に読みかえることが重大な経済学的誤謬であるのと同様に，社会＝歴史認識における重大な誤謬である[2)]。このような誤まった理解によっては，西欧的な社会＝歴史形成の特質が見うしなわれると同時に，非西欧的地帯における非市民社会的な社会＝歴史形成の特質も，また見うしなわれるのである。マルクス文献の理解についていえば，かの『宣言』をも基本的に誤解することに結果する。

それだけでなく，市民社会＝資本家社会の揚棄としてコミュニスムの理論的展望において，基本的な誤謬をおかすことになる。

すでに述べたように，マルクスの言う「近代社会」形成の過程とは，一方では，旧代的生産様式に対して市民的生産様式が闘争する過程であり，他方では，市民的生産様式が資本家的生産様式へと自己転変する過程である。前者の過程においては，共同体の破壊すなわち私的所有の形成という姿で個体的所有の開花が進展する。ただし，個体の本来的共同性を喪失するという犠牲においてである。後者の過程においては，多数の直接的生産者の私的所有が少数の大所有者によって奪いとられ，その個体的所有もまた形骸化する。そして，資本家的領有としての私的所有が一般化する。しかもそこに一般化する資本家的私的所有は，それ自体が形成する協業と，同じくそれ自体が形成する生産諸手段の事実上の社会的所有によって，特徴づけられる。資本家的生産様式にすでに転変した市民的生産様式は，その自己否定としてのコミュニスムをうみだすのであるが，そこにおいて実現するもの，それは，かの「近代」形成過程にお

2)　ただしこのような読みかえも，資本が商品と貨幣の発展形態であり，また資本が商品形態あるいは貨幣形態において実存することをとらえて，資本は貨幣であり商品であると規定することが，一定の限度において許容されるのと同じく，一定の限度において許容されうるものである。事実マルクスは，ブルジョアジーによって資本家階級を，またプロレタリアートによって労働者階級を，たしかに表現してもいるのである。それゆえ，この通例の読みかえは，誤謬だけであるのではない。西ヨーロッパでの社会歴史形成の特質の理解を拒絶しようとするものであるかぎり，この読みかえは重大な誤謬となるのである。

いて喪失した共同体の再建であり，同じく，形骸化された個体的所有の「真実化」，この意味での「再建」なのである。それは，かの西欧的文明史のひろく世界的な人類史への揚棄にほかならないのである。

この揚棄の時点において決定的に重大なことは，資本家時代にすでに事実上成立している社会的所有を，真実なものにするにあたっての，階級的な労働諸個体の自由なる個体としての開花そのものである。「近代的プロレタリアート」の自己解放過程とは，このようなものなのである。したがってまた，資本家的市民的生産様式を揚棄しきらぬ過渡期においては，いま仮に100パーセント資本賃労働関係を揚棄しているばあいにおいても，かつて同市民関係をうんだ社会的分業が揚棄されぬかぎり，したがってまた，生産と交通との分離が揚棄されぬかぎり，そこには，市民的な関係が存続するのである。たんに存続するだけでなく，生産手段の私的所有が揚棄されているだけに，労働諸個体の個体性が，かっての私的汚濁をはなれて展開するのであり，個体的不等性もまた，かっての私的骨化を揚棄しているだけに，発展さえするのである。したがってまた，そこでは，市民的な権利が，かっての市民社会よりも純粋な姿で確立するのである[3]。生産手段の社会的所有は，この権利によってその社会性を確証された勤労諸個人の個体的労働の発展そのものによって，ますます現実化し，個体的なるものと社会的なるものとの直接的融合を，実現していくであろう。

マルクスの世界史認識は，このようなものとしてあったのである。市民社会視座のうえに立脚しておればこそ，その批判的検討を通じての世界史的展望が，ひらかれたのである。

本稿が，マルクスにおける市民社会の概念について再検討したのは，このような世界史認識，このような世界史的展望を，忘却の砂漠から喚びおこすためにほかならない。

---

3)　非西欧的地帯における社会主義の実現においては，西欧的な市民＝資本家社会の揚棄の過渡段階にあらわれる市民的権利が，特殊な歴史的意義をになう。それらの地帯においては，その地主的資本家的時代において，旧代的なものが破壊しつくされず比較的強固に存在しているために，同市民関係または市民的権利が支配的なものとして成立・展開したことがないからである。そこでは，社会主義そのものが，この同市民関係あるいは市民的権利の展開を，意識的に促進しなければならない，という客観的条件におかれている。したがってまた，そのようなものの展開の構造化として，社会主義的市民社会というべきものが，概念として成立する。この概念は，西欧的な市民＝資本家社会の揚棄の一定時点においても妥当するものであるが，それが社会認識の決定的範疇として生きるのは，非西欧地帯における社会主義建設の途上においてである。念のために申しそえておくが，概念としてのコミュニスム段階とは，いかなる意味においても市民社会的なものを揚棄している段階である。